



ルー
テル

藤が丘だより

発行 月報委員会

発行日 2022年11月6日

№.

102

神の義は、イエス・キリストの真実によって、
信じる者すべてに現されたのです。

ローマの信徒への手紙 3章22節・聖書協会共同訳



礼拝献花より

御言葉に生きる

実に、信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉を聞くことによって始まるのです。

ローマの信徒への手紙 10章17節

ルター派キリスト教会 日本福音ルーテル藤が丘教会 牧師 佐藤和宏
〒227-0043 横浜市青葉区藤が丘 2-31-21 tel 045-973-2729/ fax 045-439-7009
URL:<https://www.jelc-fujigaoka.org/> mailto: fujigaoka@jelc.or.jp



シリーズ説教

『真理は自由を』

牧師 佐藤和宏

ヨハネ8章31〜36節

「真理はあなたたちを自由にする。」
ご自身を信じたユダヤ人たちに、イエスは教えられました。ところがそれを聞いていたユダヤ人たちは、自分たちがアブラハムの子孫であり、奴隷になったことはない、自分たちはいつでも自由であった。このように反論しているのです。

そこで「自由」という言葉を「救い」と言い換えてみると、ユダヤ人たちが言っているのは「自分たちはアブラハムの子孫であるから、それゆえに救われる」ということであるとわかります。アブラハムの子孫であることが、救いの条件を満たしていると考えているのです。このような彼らに対して、主イエスが言われているのは、「人の子による救いこそ、本当の救いである。それ以外ではない」ということです。アブラハムの子孫であることが、救いをもたらすことは決してなく、キリストの十字

架が人を救いに至らせるのです。主イエスが「罪を犯す者はだれでも罪の奴隷である」と言われているのも、人が罪人である以上、アブラハムの子孫であるという事実が、救いをもたらさなければならないことなのです。ただ、人の子の十字架の死が、本当の救いをもたらすということなのです。このように救いを知り、求めるようになるためには、自らが罪の奴隷であること、人間的な何ものもそこから解放することが出来ないこと。この否定的な事実を認めることが必要なのです。罪を自覚しなければ、罪の赦しは決して救いの喜びとはならないのです。

続いて真理について考えたいと思います。一般的な辞書が示す「真理」とは、人間の理解にかかっているのですが、聖書が示す真理とは、神の事柄にほかなりません。つまり、人間の常識では理解できない。しかし天地創造の初めから変わることのない、神の御心です。神が御子イエス・キリストを通して、その十字架の死を通して、私たちすべての者を罪の支配から解放された、救いの出来事です。「わたしは真理である」と言わ

れているように、神の御心によってこの世に与えられた御子イエス、この方こそ真理なのであり、この方の十字架の死こそ、私たちが罪の束縛から自由にしたのです。

さて、ルター著した『キリスト者の自由』第1項に、有名な2つの命題が次のように示されています。

「キリスト者はすべてのものの上に立つ自由な君主であって、だれにも服しない。」

キリスト者はすべてのものに仕える僕であって、だれにでも服する。」

第一の命題、「キリスト者は、すべてのものの上に立つ自由な君主である。だから誰にも支配されない。」これは福音の日課において、主イエスが「子があなたたちを自由にすれば、あなたたちは本当に自由になる」と言われていることに重なります。キリストの十字架によって、罪の支配から解放された、キリスト者は自由とさされておられ、何も支配することはできない。これが第一の命題が明らかにしていることとなります。

一方、続く第二の命題は「キリスト者は、すべてのものに仕える僕であって、だれにも服する」とあり、

第一の命題とは正反対のことが言われているのです。第一の命題で言われていることを、完全に否定しているのが、第二の命題になります。ここでルターが言い表そうとしていることを知るために、私たちはイエス・キリストを思い起こすことが大切になってきます。

キリストは神の子であり、だれにも支配されることのない、自由な方でした。しかしキリストは、すべてのものに仕える者となられたのです。ルターが「キリスト者の自由」の第1項で、2つの相反するようにみえる命題を表しているのは、キリストが私たちのために、してくださったことを表現していることがわかります。キリスト者はこのキリストに倣う者として、キリストの十字架によって、罪から解放された者として、キリストと同じようにすべての人々に、強いられてではなく自由な意志をもって仕えるというあり方が示されているのです。そしてこのキリストこそ、「真理」なのです。

イエスを信じたユダヤ人たちは、自分たちは奴隷になったことはなく、今に至るまでいつも自由であったと

主張しています。しかし主なる神は律法において、エジプトの地で奴隷であった際、自分たちが「寄留者」であったことを思い起こすようにと教えています。出エジプト22章20節

には、次のようにあります。「寄留者を虐待したり、圧迫したりしてはならない。あなたたちはエジプトの国で寄留者であったからである。」また、レビ記19章34節には「あなたたちのうちに寄留する者をあなたたちのうちの土地に生まれた者同様に扱い、自分自身のように愛しなさい。なぜなら、あなたたちもエジプトの国において寄留者であったからである。わたしはあなたたちの神、主である。」いづれも、寄留者であったことを思い起こさせ、イスラエルに寄留している人々への配慮することへの動機づけとなっているのです。ユダヤ人にとつて「奴隷であった」「寄留者であった」という事実は、忘れなければならぬような否定的な経験に思われませんでした。しかし聖書を通して神は「奴隷であった」「寄留者であった」経験があるからこそ、今や弱い立場の人々に配慮することができると、否定的にみえる経験に、実は積極的

な意味が与えられていると告げているのです。ここに聖書が示す、神の真理があるのです。

第二の朗読でお読みいただいた、ローマの信徒への手紙3章22節に次のようにありました。「イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です。」「キリストを信じることにより」という訳に問題提起がなされていましたが、2018年に出版された聖書協会共同訳では「神の義は、イエス・キリストの真実によつて、信じる者すべてに現されたのです」とされています。「キリストを信じる」という私たちが人間の行為ではなく、ただ「キリストの真実」が私たちを救うのです。これが初めからある、神の御心であり、イエス・キリストによつて実現した、神の愛なのです。この神の愛が、人となつて私たちの間に住み、私たちと共にいて、私たちの罪の赦しのために、十字架の死を遂げられたのです。これこそ、初めから変わる事のない、真理であり、キリストによつて示された、神の真実なのです。この真理が、私たちを罪の束縛

から本当に自由にする、神の力なのです。

ルターは「キリスト者の自由」の第27項で「私もまた、私の隣人に対して一人のキリストになりたい」と書いています。ちょうど、善いサマリア人のたとえに登場する、一人のサマリア人が傷つき倒れている人を見て、憐れに思い、近寄つて、徹底的に仕え、その人の隣人となつたように、私たちキリスト者も、それぞ

れの隣人に対して一人のキリストになりたいと言っているのです。つまり、キリストという真理によつて、自由にされたのだから、私たちもまた、誰かを自由にするために、真理であるキリストとなつて、仕えたいということなのです。キリストによつて、自由とされた群れとして、すべての人々の隣人として、喜びのうちに仕えてまいりましょう。

(宗教改革主日)

「トルストイの民話」

〇谷〇介

トルストイの民話を最近読みました。トルストイが敬虔なクリスチャンであり、裕福な家の生まれであることを知りませんでした。この民話で、子供や私のように頭の弱い大人にも良く分かるように聖書をトルストイ語で話してくれています。イワンの馬鹿は皆様ご存じですね。3人の隠者、イリヤス、人は何で生きる、2人の兄弟と金貨、愛あるところに神もある、悪魔の仕業は見事でも、神の仕業はゆるぎない等からお金に

は悪魔が取り付いているからの方が良い。裕福だと幸福になれない(質素な生活をする)と幸福になれる)。病氣と幸せとは関係ない(健康になろうと思わない方がよい。神様にお任せする事だ)知つていても仕方がない。実行しなければ。お孫さんにプレゼントするのに良い本だと思ひました。これを読んで稲垣えみ子さんの(寂しい生活…他人は寂しい生活と思うだろうが実は幸福な生活を彼女はしていると言っている)。(シンプルに生きる…ドミニック・ローホー)数年前に読んだ本ですが頭をかすめました。

